関東大震災から100年　震災と武蔵野市

大正12（1923）年9月1日、相模湾西北部を震源とするマグニチュード7.9の巨大地震が発生しました。都市化に向かう東京や神奈川を中心に甚大な被害をもたらしたこの「関東大震災」から今年でちょうど100年。当時の武蔵野市域との関わりを振り返りながら、未曽有の大災害から私たちは何を学び、語り継ぐべきかを考えてみましょう。

震災をきっかけに武蔵野市域の人口が増加

大正12年9月1日、午前11時58分。相模湾西北部を震源とするマグニチュード7.9の巨大地震が関東地方南部を襲いました。この地震により、東京市街の3分の2の建物が焼失、横浜は市街の大半の建物が焼失あるいは全壊・半壊の甚大な被害をもたらしました。死者・行方不明者はおよそ10万5000人、被災者は190万人にも上ったとされています。「我が国の自然災害史上最悪」といわれるこの未曽有の大災害から、今年で100年がたちました。これを機に、関東大震災と武蔵野市がどのように関わったのかを振り返ってみましょう。

大正12年当時の武蔵野市域は、まだ「武蔵野村」と呼ばれていました。関東大震災の前年の大正11（1922）年12月時点の武蔵野村の人口は5227人。武蔵野台地の頑丈な地盤の上にあったことや、震源地から離れていたこと、建物が密集していない農村だったことなどから、数軒の建物の倒壊などの被害はあったものの、武蔵野市域での死者・行方不明者はいなかったといいます。このため、被害の多かった都市部などから被害の少なかった武蔵野市域へ、震災後に移り住む人々が増加しました。特に吉祥寺地区の人口増加はめざましく、震災前の大正9（1920）年の2325人から大正13（1924）年には5139人へと倍増しています。

震災をきっかけに武蔵野市域の人口が増加したことは確かですが、武蔵野市域における郊外住宅地化の動きは関東大震災発生以前から既に始まっていました。明治22（1889）年に開設した甲武鉄道の境停車場（現在の武蔵境駅）、明治32（1899）年開設の吉祥寺停車場（現在の吉祥寺駅）など、明治期には既に都市部との交通手段が確保されていました。さらに、大正8（1919）年には、中野駅・吉祥寺駅間の路線が電化されています。

郊外住宅地化の準備がある程度なされていたからこそ、武蔵野市域は都市部に住んでいた人たちにとっても移り住みやすい環境だったといえるでしょう。そして、移住者の増加が、武蔵野市域の郊外住宅地化をいっそう加速させていったのです。

▲東京大震災明細地図（武蔵野市蔵）

武蔵野の人々が被災者を積極的に支援

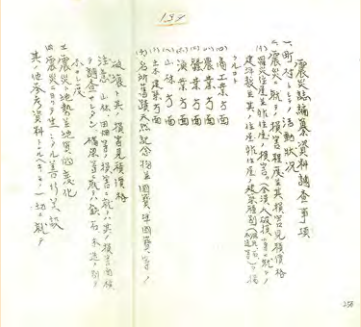
被害が少なかった武蔵野市域には、被災者を積極的に迎え入れ、支援活動を担う役割が期待されました。震災後、村役場や住民たちが被災者に対してさまざまな支援や救援活動を行ったことが記録に残されています。村役場や村の青年団は、被害の大きかった都心部に食料や衣料、日用品などをたびたび送っていました。また、武蔵野市域に移住してきた被災者で生活に困窮している人たちに対して、青年団が村内の有志から寄付金を集めて食料品を給付し、村役場も100袋もの小麦粉を配布するなどの支援活動を行ったといいます。

取材・文／さくらい伸

さらに、吉祥寺駅に停車中の列車に乗っている被災者に対して、青年団の団員と、当時、吉祥寺に校舎があった東京女子体操音楽学校（現在の東京女子体育大学）の生徒が湯茶を提供したことが文書で報告されています。自分たちは被害が少なかった分、被災者に対してできることをしてあげようという武蔵野の人々の思いが、こうしたエピソードから読み取れるのではないでしょうか。

体験したことのない大災害に見舞われた時、人々は恐怖や不安から根拠のない「流言飛語」やデマに惑わされ、差別や偏見に基づく言動をする人も現れます。その一方で、称賛に値する行いに対しては「善行美談」として政府が主体となってエピソードを収集する対象としました。前述の吉祥寺駅で被災者に湯茶を振る舞った話も、北多摩郡長から武蔵野村への調査依頼に対する回答に記されていたものです。混乱が広がるときだからこそ、他者への心配りなどの温かい話題が人々を元気付けるのかもしれません。

▲善行者調査（武蔵野市蔵　発災２カ月後の北多摩郡長からの照会）



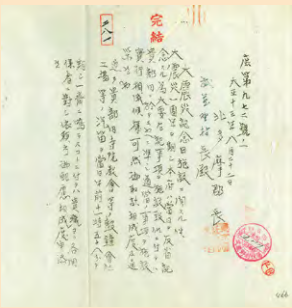
▲「美談」の収集（武蔵野市蔵　北多摩郡長からの照会に付されていた）

当時の記録を元に震災の記憶を語り継ぐ

100年前の関東大震災を実際に体験した人の多くは既に亡くなっていると考えられることから、個々人の災害の記憶は時とともに消滅していきます。災害の犠牲になった人々への鎮魂のためにも、災害を風化させず、次に来るかもしれない災害への教訓として定期的に震災を振り返ることも大切です。

震災の翌年にあたる大正13年から、政府や東京府（現在の東京都）が主体となって周年行事を行っています。大正13年8月22日付で武蔵野村長宛てに送られた「大震災記念日施設ニ関スル件」という文書を受けて、村内に通知文が出されました。そこには「遭難者追悼と将来の平安祈念」「奢侈（しゃし）（ぜいたく）を排し、歌舞音曲その他の遊楽類の遠慮、断酒、粗衣粗食による反省」「防火・非常時の用意について考慮する」などが挙げられています。震災の翌年ということもあり、村民に対してさまざまな自粛が促されているのが印象的ですが、同時に日ごろから防災の準備をしておく必要性についても触れているところに、現在に通じる教訓を当時の人々が得ていたことがうかがえます。

災害の歴史を振り返る際の材料として重要になるのが「記録」です。これまで取り上げてきたさまざまな出来事は、すべて公文書などの記録に残されていたもので、これによって今生きている私たちは当時の出来事を知ることができます。公文書だけでなく、災害を体験した個人の日記、聞き書きなど、当時の人々の心のありようなどを記したさまざまな記録を保存していくことが、いつ起きてもおかしくない次の大災害に対する備えや「減災」にもつながるといえるでしょう。



▲震災１周年にかかる注意事項（武蔵野市蔵　北多摩郡長から武蔵野村長へ宛てられた文書）

明治・大正期に活躍した物理学者の寺田寅彦は、関東大震災の経験も踏まえ、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を残しています。著書『天災と国防』の中でも、文明が進むほど天災による損害が大きくなるにもかかわらず、日ごろから防御策を講じない人が多いのは、天災がまれにしか起こらないと思っているからだ、と記しています。

震災の翌年の大正13年には5139人だったとされる武蔵野村の人口は、武蔵野町から武蔵野市となり、昭和39（1964）年には13万人を超えるまでに増加しました。人口増により建物が密集し、インフラが複雑に絡み合う現代では、昔以上に日ごろから災害に対する備えを徹底しておく必要があるのです。

100年前の大災害から私たちは何を教訓として、次に生かすべきか、100年目のこの節目に改めて考えてみたいものです。

参考文献／『震災と歴史公文書～関東大震災100年』（武蔵野ふるさと歴史館）、『天災と国防』（寺田寅彦）

取材協力／武蔵野ふるさと歴史館